

◆◆◆会計報告◆◆◆

(2011年3月21日～2011年9月10日)

募金会計		活動費会計	
収入		収入	
一般会費	1,278,561	活動費寄付	10,000
賛助会費		雑収入	0
寄付金		その他	0
助成金	200,000	普通利息	
普通利息	97	小計	10,000
雑収入	0	支出	
小計	1,478,658	活動費	2,305
支出		バザー仕入れ	8,373
支援金	2,302,366	印刷費	10,862
送金手数料	28,000	文具資料費	4,380
		通信費	38,750
小計	2,330,366	小計	64,670
前期繰越金	1,702,000	前期繰越金	55,969
当期収支	-851,708	当期収支	-54,670
次期繰越金	850,292	次期繰越金	1,299

<会計報告の説明>

【助成金内訳】

●高野道郎メモリアルジャパナムプロジェクト 200,000円  
→下記の\*1の一部(20万円)

【支援金内訳】

■カオバン省保健プログラム 401,904円  
■ゲアン省診療所 243,570円  
■ホーチミン市 AIDS 診療所 83,730円  
■ホーチミン市 StreetChildren\*1 243,570円  
■ホーチミン市 AIDS プログラム 243,570円  
■ホーチミン市 AIDS 感染児ケア 83,730円  
■ピントゥアン省道路補修 253,312円  
■ピンフック省山岳民族寄宿舎 243,570円  
■ソックチャン省バックハイ 276,046円  
■ソックチャン省ダイハイ 66,484円  
■カマウ省自転車 162,380円

# チャオ・ベトナム

## J A P A V I E T N A M 会報

NO.42

発行者：ジャパ・ベトナム事務局 発行日：2011年10月1日

◆2011年ベトナムツアー.....1	◆寄付者一覧.....7
◆ゲアン省とソック・チャン省と.....4	◆柴田幸範さんの訃報.....7
◆ヴェトナム視察ツアーに初めて参加して.....5	◆会計報告.....8
◆束の間するとき、永遠のとき.....6	

### 2011年ベトナムツアー 経済成長の狭間で生きる人びとと共に

小野 浩美

7月22日(金)～8月9日(火)までの19日間、ベトナムツアーを行いました。全行程参加者は、安藤勇、中村洋子、篠崎翠、小野浩美の4人、部分参加者は島村晶子1人でした。私事ですが、4年振りにツアーに参加し、20年の活動を振り返るよい機会となりました。

#### ●カオバン省立病院

今年はチャーリン県に出かけ、ヌン族の民家と村の診療所を訪問しました。カオバン市から車で1時間ほど、車窓から見る途中の景色は、岩山と緑の田畑が本当に美しく桃源郷のようです。訪れた民家は、床が抜けそうな高床式家屋に、86才のおばあさんが息子と孫2人で暮らしていました。田畑も少なく、息子は脳の病気で、政府から米や教育費の援助を受けて生活しています。この地域にはこのような貧しい家が、170軒あるそうです。はじめてカオバンを訪問した時、レ先生が「多くの人が米やトウモロコシがなくなると野菜だけ食べてしのぐ」と話していたことを思い出します。山で暮らす少数民族の人々の暮らし向きは、この19年であまり変化していないと思いました。そのあと訪れた診療所は、ベッドが2つ、分娩台、薬棚が置かれた診察室、宿直用ベッドの簡素なつくりで、常時1人が宿直するそうです。1日5人位の患者があり、普通のお産はこの診療所で行います。若い看護師は、テトやお祭りの時はけが人が多いと話していました。乏しい設備ですが、診療所は村人にとって大切な役割を果たしていることがうかがえました。

19年前の省立病院は中越戦争で建物が破壊されて、医療器具が殆どない中で診療を行っていました。その後国の予算や海外からの物はずいぶん増えて立派になり、医療器具も徐々に整備されてきました。小児科もずいぶん充実してきています。昨年はVIP用病棟も建てられたと聞き、ジャパ・ベトナムの支援がまだ必要だろうか疑問を感じていました。地方を訪問する中で、今後も保健教育を続けていく意味を改めて感じ、省立病院がその役割を担っていることで、ジャパ・ベトナムの支援の必要性を再認識しました。

#### ●ゲアン省フンチュン県の村診療所

支援で作られた待合所の屋根は2日前に工事が終わったばかりで、今日の午前中には予防注射でたくさん子どもが集まって、とても喜んでいたという話です。訪問した時は、村人が何人か集まり、待合所の日陰でたむろしていました。

### JAPA VIETNAM をご支援ください

JAPA VIETNAM にご支援いただくには、以下の三つの方法があります。

- 一般会費 年間1口(2000円)以上
- 賛助会費 金額・時期ともご自由に
- 活動費寄付 活動費の支援(金額自由)

どれになさるかはご自由にお選びください。封筒の宛名ラベルの一番下に、会費の種類と前回のご入金日を表示いたしますので、ご都合に応じてご送金いただければ幸いです。

【ご送金は郵便振替で】

00100-8-118761

JAPA VIETNAM

【銀行をご利用の場合は】

三菱東京UFJ銀行 四谷三丁目支店

東京女子医大出張所

普通預金 3544236

JAPA VIETNAM 代表 安藤勇

会費をお振込みいただいた方には、葉書で領収書をお送りしています。領収書が不要の方は、振込用紙の通信欄の「領収書は要りません」の口にチェックを入れてください。事務費削減にご協力いただくと幸いです。

### 紙名『チャオ・ベトナム』について

「チャオ」(chào)とはベトナム語で「こんにちは」という意味です。『チャオ・ベトナム』というタイトルには、ベトナムの人たちと友情のネットワークを築いていきたいという、私たちの願いがこめられています。

### ベトナムの未来にあなたの力を

## ジャパ・ベトナム (日本ベトナム民間支援グループ)

### JAPA VIETNAM

(Japanese group of Private Assistance to VIETNAM)

〒102-0083 東京都千代田区麹町 6-5-1

岐部ホール4階

イエズス会社会司牧センター内

電話 03-5215-1844

FAX 03-5215-1845

e-mail:chao@japa-vietnam.org/

http://www.japa-vietnam.org/

\*アドレスが変更になりました

# ご協力ありがとうございました

2011年3月21日～2011年9月10日までの会費・寄付納入者のお名前です(敬称略)

阿部 節子	春日井市	倉澤 伸子	大阪市	戸村 信子	長崎市
飯田 幸子	足立区	栗栖 幸江	広島市	中嶋 俊之	江戸川区
イエズス会大船修道院	鎌倉市	小池 美恵子	国分寺市	中村 直子	札幌市
池村 貴子	町田市	コンスタン・ルイ	板橋区	西山 正子	足立区
石川 和男・直美	江別市	齋藤 在道	京都市	根岸 寿	神戸市
石坂 清一郎	品川区	佐竹 道子	茅野市	長谷川 春子	安曇野市
逸見 裕一	さいたま市	佐藤 政信	草加市	畑中 雅信	清瀬市
井手 公平	北九州市	佐野 純	練馬区	服部 栄子	豊島区
出原 久美子	所沢市	柴田 幸範	習志野市	範 ちはる	荒川区
出村 俊輔	三郷市	澁谷 節子	足立区	樋口 禮治	豊川市
今川 節子	小金井市	イエズス会本部	千代田区	福井 武	市川市
岩田 瑞枝	川崎市	関本 浩平	横浜市	堀井 美枝子	札幌市
江口 一郎	川崎市	高橋 正江	練馬区	マリアの御心会	茂原市
岡田 典子	杉並区	高山 親	大阪府	宮坂 淑子	さいたま市
岡部 治	名古屋市	滝戸 玲子	船橋市	向井 孝男	国立市
柿坂 玲子	豊島区	武市 英雄	相模原市	村田 光司	那覇市
柏村 忠志	土浦市	武内 清子	横浜市	森山 昌樹	豊島区
梶村 伸浩	函館市	武川 晃朗	鎌倉市	柳下 修	横浜市
カトリック聖心侍女修道会		武永 賢	新宿区	箭島 多美子	広島市
	品川区	武永 蘭	杉並区	山形 辰史	新宿区
五反田第二修道院	品川区	多勢 三枝子	練馬区	山本 喜代子	練馬区
カトリック礼拝会	世田谷区	玉木 邦江	練馬区	山本 昌子	杉並区
岸 秀雄	鎌倉市	辻村 寛行	清瀬市		(以上 67 名)
木野 友義	岡山市				

## ●H.C.M.市タオダン

タオダンは現在、220 人の子どもを世話しています。約 100 人の子どもの出生証明書取得を助け、学校に通えるようにしました。放課後ここで勉強をみてあげたり、進級の手助けをしたり、また、社会、文化問題のセミナーや、コンピュータ、英語クラスも開催しています。この 20 年で、ストリートチルドレンの状況もずいぶん変化しましたが、タオダンはその変化によく対応して、活動を続けていると思います。安藤さんが、「日本では、ベトナムは経済発展しもう貧しい人はいないのではないかという意見があるが、どう思いますか」と尋ねたところ、学生ボランティアの男性から「経済発展して貧困層は 20%から 18%に減っているが、政府の政策で救えない部分がある」と返答がありました。きちんと考えていると思いました。



## ●H.C.M.市エイズ・プログラム (バン・グループ)

2 つのグループに分かれ、私達はピンタン区で 2 軒の家を訪問しました。1 軒目は夫婦が感染し子どもは感染していない家族で、親が近くに住み家族の生活を支えています。2 軒目は、夫が 2 年前に麻薬で捕まり精神を病んでしまった妻に、バン・グループのメンバーが関わり続ける中で、最近やっと元気を取り戻したケースです。夫婦とも感染していて、生活は一緒に住む両親が支えています。バン・グループはこのエリアで 55 人位の人をサポートしています。数年前からベトナムに対し海外の支援が入り、一方で感染者の状況はよくなってきていますが、一方でこうした困難なケースは減っていないという印象を受けます。

待合所と塀の間の草地をタイルにして、蚊対策と運動ができる場を作る計画を考えていて、来年度の支援を要請されました。国からは、2 階建て診療所を新築する予算がおりたそうです。若い医者や看護師達の生き生きした表情が、とても印象的です。大きな部分は国のお金で進め、小さな部分はジャパ・ベトナムの支援で改善し、全体として村の診療を向上させていくという連携が、ここではよく見えます。

## ●ゲアン省ジエン・チャウ

ハイさんとの話し合いは、今回のツアーの一番の難問であり、緊張して臨みました。村での診療をハイさんに担ってほしいというジャパ・ベトナムの当初からの要望と、医師としてのステップアップや自宅改築も含めた診療所建設を支援金で進めたいというハイさんの要望がかみ合わないで、経過してきました。2 年間話し合いが直接できなかったため、ハイさんも今回は仕事を休んで話し合いに臨みました。そして「今の自宅を改築し、将来は子供がいないお年寄りの施設をつくりたい」と自分の夢を率直に語りました。それは、今まで双方で確認してきたこととは全く別の話です。彼は「ジャパ・ベトナムに今後も応援してほしい」と話す一方で、「他の NGO へ支援を頼んだり、親、兄弟からもお金を集めなければ」とも話しました。今使われていない診療所を使って診療するというこちらの提案に対し、「自分が行わないが代わりの人を出す」とも話しました。お互い率直に意見を出して話し合えたことで、いい結果を生んだと思います。ハイさんの構想について、ジャパ・ベトナムとしては、今後見守っていく姿勢で考えています。

## ●H.C.M.市ニョム・ティエンボン

この診療所にやってくる AIDS 患者は、貧しくて病院に行けない人や末期の人で、40%は H.C.M.市以外から来ています。1 日 25 人から 50 人位の患者さんを診ていますが、10 人中 2 人が亡くなるそうで、身寄りのない人の葬式の世話も行っています。勢いよく話しかけるピンさんは笑いながら、「患者は増え、薬代は上がり、予算は増えないことが一番の問題」と言いました。やりきれないようなケースに日々関わりながら、よく活動を続けていけるものだと、私は感嘆の念を覚えます。

## 訃報

### 柴田幸範さんの早すぎる死を悼む

柴田幸範さんが、8月24日病気のために亡くなりました。まだ51才の若さでした。

あまりに早い死を悼み、心からご冥福をお祈り申し上げます。

柴田さんは、ジャパ・ベトナムの事務局の仕事を一手に引き受けて、進めてくださいました。柴田さんの働きがなければ、ジャパ・ベトナムはこれまで続けてこれなかったといっても過言ではありません。これからは、スタッフが力を合わせて精一杯バトンを引き継いでいきますので、どうか天国から見守ってください。今まで、本当にありがとうございました。

島村 晶子

30台のかご付き自転車は、日の光を受けてピカピカしている。パイプの一部にだけ、きれいな色がとりどりに塗られている。どれも大人が乗るような大きさで、自転車を受け取ろうと並んでいる子どもたちの中には、またがるのがやっとと思える小さな子までいる。

カマウの空港から40キロ余りか、車とボートを乗り継ぎたどり着いた地で、子どもたちへの自転車贈呈式が行われた。2度目のジャパ・ベトナムのツアー参加となった私も、ここで来賓として同席するという栄誉に与ることになった。

カマウは、ベトナム最南端に位置するメコンデルタの地である。網の目のように張り巡らされた川は、人々の移動を助けることもあり、妨げることもある。貧しい子どもたちにとって、船に乗れば通学はとても楽だが、運賃は到底払えるものではない。ちょうどよい場所に橋があれば、学校への距離が短くなる。2009年、ジャパ・ベトナムは橋の建設を支援した。そして今年、貧しい子どもたちの通学用自転車を買う費用をプレゼントした。炎天下だったり、スコールに見舞われたり、悪路だったりの自転車通学は至極快適とはいかないだろうが、延々と歩くよりはずっと楽であるはずだ。

子どもたちは、心なしか緊張しているようだ。あまり笑顔が見られない。あまのじゃくの私は首をかしげる。もしかして、この中には学校が嫌いな子もいるのかも。この思いがけないプレゼントを、ちょっと負担に感じているということもありえるかも...

しかし、ベトナムで出会った市民グループのリーダーの誰もが強調するように、貧しい子どもたちにこそ、学校教育は大切である。基本的な学力の必要性や学歴が将来を左右するということはもちろんあるが、たとえ勉強が苦手でも、学校生活の中でつらいことがあっても、家庭や地域とはちがう社会で人間関係を築き、新しい知識を得る経験は、自分自身を見つめて考える力を養うという点でも、極めて大切なものである。

子どもたちの声が直接聞きたいからと呼ばれた高校入学前の少年は、通訳のDさんの励ましにこたえて、はにかみながら懸命に語ってくれた。父親は出稼ぎで不在、母は病気であるので、自分は学校から帰ってから近所で仕事をもらって

家計を助けている、中学は歩いて通えたが高校はとても遠く、船に乗るお金は高いので、自転車はとても有り難い、と。

そして、式が終わると、子どもたちは緊張がとけたのか笑い合いおしゃべりし出し、自転車を引いて帰る後ろ姿は皆とてもうれしそうで、私の心配は見事打ち砕かれた。

今回私がもう1か所だけ同行したビンフック省でも、少数民族の子どもたちに教育を受けさせることに重きを置くプロジェクトが展開されている。日本語の歌で出迎えてくれた子どもたちは、歌うのを心から楽しんでいる様子だ。笑顔で、一緒にご飯食べようよと呼びかけてくれたりする、一時の訪問者ともつながりを持つとうとする屈託のなさ、2004年に訪れた時に強く心に残った印象と変わっていなかった。シスターたちに愛情深く接してもらいのびのびと育っているということ、この子たちと会うと心底感じられる。

いまだ迷いの多い私のベトナムとの関わりの中で、ずっと変わらず感じていることがある。それは「とき」である。今回の短い参加を振り返り、改めてそれを思う。ジャパ・ベトナムの支援先は多く、範囲も広い。ツアーでのひとつの支援先での時間は、東の間のときである。しかし、これまでずっと地道に続けられてきた訪問の中で、リーダーたちや支援される人たちと触れ合い、人との出会いとつながりを深く感じられたときがあるなら、それはたとえ記憶の奥底にしまわれてしまっても、なかったことにはならない永遠のときであるのだ。先ごろ天に召された柴田さんのことを思うと、心の痛みはどうすることもできない。でも、柴田さんがベトナムと向き合った時間もまた、それを思う時私たちにとっても、かのベトナムの地の人たちにとっても、永遠に消えないときだと心から信じている。



そのあと事務所に合流し、感染者との交流会が持たれました。バンさんから、今後ベトナムに対する国際支援が撤退していく話が出され、さらに政府による統制が強まり活動がしづらくなることへの懸念が出されましたが、私達としてもとても気になる問題です。

●H.C.M.市スマイル・グループ

去年の11月に事務所を移転し使いやすくなった環境の中で、2才から18才までのHIVに感染した子どもを対象に活動をしています。今年家族68人がダラートに遊びに行ったそうで、パソコンで編集した画像を見せてくれました。夏休みの間は週4日、ヨガ、英語、アドビー、文化のクラスを開催していて、40~50分かけて自転車で通ってくる子供もいます。HIVに感染している子どもが、家族的な雰囲気の中でのびのびと色々なことに取り組めるよう、配慮されていることを感じます。一方、ここを活用できる条件は、学校に行っているとのことで、子どもを学校に行かせていない親が支援を求めて来た時、断ったと聞かされました。学校に行かせるよう親に働きかけ、行くようになった子どもが変わったという話も出されましたが、学校に行けない子どもはどうなるのか気になりました。また、新事務所の家賃を尋ねましたが、返答がなかったことも気になりました。今後、継続討論の必要性を感じています。

●ソックチャン省バックハイ

午前10時半に到着し、午後からボートで村をまわり、7軒の家を訪問しました。戦争中枯れ葉剤工場で仕事をしていたという寝たきりの75才の男性、半身麻痺で車椅子で暮らす姉妹、1人暮らしの精神疾患の女性、隣に住む妹、半身不随で寝たきりの父を世話する家族、精神疾患の姉妹を抱える家族、知的障害の兄弟と両親の家族。途中雨に降られ雨宿りをしながら、3時間かけて訪問しました。以前は写真でしか知ることのできなかった村の様子が少しかめ、有意義な訪問でした。とても困難な地域であることを、改めて実感しました。

バン神父は、教会の敷地に障害者の施設をつくりたいと話しました。今回村をまわる中で、それぞれが抱える障害は様々で、支える家族の状況も異なっていることを知り、施設をつくることかいいのか、疑問を感じています。また、各々

の家族は収入の道が乏しいという共通の問題を抱えていることもわかり、以前ゲアン省の教会で村人が集まって竹細工をしていたことを思い出し、ここでも何か軽作業ができる作業所をつくり村人が参加できたら、村の活性化につながるのではとも考えました。今後、バン神父と話合っていたらと思います。

●ビンフック省山岳民族子どもの家

ロンハーにある、スティン族の集落に案内されました。省道から車で30分奥に入ったところにあり、以前は省道の近くにありましたが、20年前に移動させられたそうです。公安の監視が厳しく、少しずつ少しずつ集落に入って関係をつくったと、シスターから聞かされました。この貧しい家族に、修道会が建ててあげた家を見学しました。

今まで、ロンディエンの子どもたちの家に対する支援を中心に行ってきましたが、周辺にはこのような山岳民族の集落が、多数点在しています。シスター達はそれらの集落に入り、生活を助けたり、学校に行けない子どもに識字教室を開いたりする活動も行っています。サポートする地域がだんだん多くなり、喜ばしいことですが、それぞれの場所から支援を申請され、私達もどのように優先順位をつけていくのか迷います。

この20年でH.C.M.市やハノイでは、高層建築が増え道路整備が進み、経済成長めざましいことを実感させられます。だが、H.C.M.市でバイクで路地を奥へ奥へ入り込んだり、地方で国道からはずれどどん車を進めたりすると、20年前からあまり変わる事のない暮らしを、多く目の当たりにします。ベトナム社会は大きく変化したが、置き去りにされた困難はたくさん残されているというのが、20年間ベトナムに関わり続けての率直な感想でしょうか。ジャパ・ベトナムの支援はささやかながら、1人1人の生活のレベルで、その困難を少しでも軽減する役割を、確かに果たしてきたと考えます。今後も、皆様の温かいご支援とご協力を、どうかよろしくお願い申し上げます。

ソックチャン省ダイハイ、カマウ省、ビントゥアン省については、紙面の都合で報告を省略させていただきました。

ベトナム人に言わせると、北中部で貧しい省がゲーアン省で、南部で貧しい省がソックチャン省なのだそうです。

今年もジャパベトナムのツアーはベトナムの北から南を縦断し、12か所の支援先を訪問してきました。その中に、このゲーアン省とソックチャン省も含まれています。同じ「貧しさ」でも、貧しさの形が違うのに気がつきます。この貧しさの違いはどこから来るのでしょうか。

ゲーアン省は、地図を見れば細長く、やせた土地が多いので自然的な貧しさが大きな要因なのだろうと容易に納得できます。それに比べてソックチャン省は、水と緑の豊かな省で、それだけを見たら自然的な貧しさが主な要因ではないと感じ取れます。

今回のツアーでは、ゲーアン省では小さな村の診療所を訪問しました。診療を待つ患者さんたちのために厚いトタンの屋根を支援したのです。私たちの到着2日前に完成したというその屋根の下に入ったら、確かに容赦ない日差しを遮ってくれて涼しい待合場所になっていました。とても喜ばれ、私たちも嬉しかったです。貧しい中から見せてくれるこぼれるばかりの感謝の笑顔。

ソックチャン省では、今回初めて、おそらく普通の人もほとんど訪問しないような奥地の川べりにひっそりと存在している貧しい家庭を何軒か訪問する機会が与えられました。川べりに沿って家々を覆うように茂っているヤシの木などのせいで、ボートで川面に出ない限り太陽がさんさんと降り注いでいる、という光景からはちょっと遠いです。川べりの家々も、少し低地に建てられているので湿った感じがするし、何にもまして、家の様相を呈していない家が多いのに驚きました。ジャパベトナムとしては、来年度のために、依頼のあった腐って落ちてしまった屋根と壁の部分修復するためのヤシの葉を買うお金を支援することになるでしょう。また、この辺には精神障害者が多いのも驚きでした。

ある家に入った時、そこに何年前からかはわかりませんが、おそらく40年近く経っているのではないのでしょうか、ソックチャン省に

あったという「枯葉剤」の工場で働いていて事故にあいそれ以来の身障者として固い竹のベッドに横になっている姿に胸がえぐられる思いがしました。重度の精神障害を抱えた子供たちを抱え、定期的な現金収入もないこの人たちの生活を想像するだけで、同行した教会の神父さんがポケットから取り出して家族に手渡す何枚かの紙幣に、お金をあげて解決する問題ではないとわかりながらも、そうせざるを得ない、あるいはそうしなくてはならないその行動に納得感を覚えました。

政府からの援助はないようで、医師の回診などもってのほか。教会の無料薬局で薬を買ってくるだけだと聞きました。そばに家族がいるから生き伸びていらられるだけの姿に本当に心が痛みました。私はいまだに、それらの様子が心から離れず精神的に立ち直れていません。戦争中、アメリカという敵国の「枯葉剤の工場」で働いていたこと、そしてそこで起きた事故のための後遺症…だからでしょうか？・・・戦後35年以上経ち、国内は平和になったのにまだこのような状況が現存していることに一種の悲しさを感じましたし、そこに住む人たちの貧しさの原因を垣間見た気がして、とても残念に思いました。私の大好きなベトナムの平和と安心を心から祈りたいと思います。



バックハイで訪問した家

わたしがヴェトナムに興味を持ったのは1960年代でした。以後、いつか行きたいと思いつけていたのが、今年、ついに実現しました。今回のツアーは、ハノイから入って3か所訪問し、次にホーチミンを拠点として9か所を訪問しました。その中から特に心に残った訪問を書いてみます。

**Cao Bang 省「省立病院」**

最初の訪問先は病院でした。ジャパ・ベトナムは、19年も前から援助をしているということで、スタッフの方々はみな顔なじみです。大歓迎を受け、お互いに再会を喜び合っていました。新参者のわたしは、一人取り残されたような感じで、緊張感を持ちながら、訪問の第一歩を始めました。

病院の方は、まず初めに、3・11東日本大震災と大津波の犠牲者への哀悼と、被災者たちへのお見舞いのことばを述べられました。このことは、行く先々で繰り返されました。

この病院は、国からの援助、外国からの援助、そしてジャパ・ベトナムからの小規模援助を上手に使いわけて運営していると思いました。何よりも、医師も看護師も生きいきしているのが印象的で、とても気持ちのよい訪問でした。

**Nghe An 省 Hung Nguyen 県 Hung Trung 村の「診療所」**

ここでは、若い二人の医師と看護師さんの喜びと希望に満ちた姿が新鮮でした。

7月25日に屋根が完成し、27日に子どもたちの予防接種が終わったそうです。予防接種は27日当分の午前中、わたしたちの訪問は午後でした！

**Soc Trang 省「Bac Hai 教会」**

教会の前が船着場。ここでは舟が交通手段で、モーターボートに乗っての訪問でした。7軒の訪問をしましたが、一番心が痛んだのは民間の枯葉剤工場に働いていたという75歳の男性。国の工場に働いていれば保障も出るが、民間の工場に働いていたため、国からは何の保障も薬も出ない。右目と胸が爛れていて、それは目をそらせたくないような気の毒な状態でした。

もう一軒は、知的障害の兄弟の家。この兄弟はにこにこしていて幸せそうに見えました。でもその陰では、お母さんが安い賃金で一日何千枚のお皿を洗って働いて、家計を支え家族を養っているのです。

**Ca Mau 省 Cai Nuoc 県「Cai Doi Vam 村」**

ここもボートで訪問。息ができないぐらいの速さで、何の案内もない迷路を走る。水の色は煉瓦のように赤い。「転覆したらどうしよう！」なんてことが頭をよぎったけれど、それ以上考える間もない超

スピードでモーターボートは疾走しました。船着き場の前に、薫びき屋根の教会があり、そこに30台の新しい自転車が整然と並べられてありました。中学生と高校生の援助のためです。

自転車を貰った一人の男の子の話を聞くことができました。「小学校のときは家から歩いて行かされたけれど、中学校には毎日ボートで通わなければならず、往復5万ドンもかかる。父親は出稼ぎに出たまま、母親は病気で入院中。自分は働きながら学校に通っている。食事は自分で作る。」彼は、自転車を貰ったことがどれほどうれしかったかを、顔全体で表していました。うれしそうな彼を見て、素敵なよい援助ができたと思いました。

**ホーチミン市「エイズ・プログラム」**

Binh Thanh 区の感染者家庭3軒の訪問は、あいにくの大雨で途中までタクシーで行き、タクシーが入れないところではバイクを乗り継ぎました。傘を半分閉めないといけないような細い道をバイクで走る。家の壁にぶつかりそう、窓にぶつかりそう、よそ見などできない、曲芸だ！バイクの後ろに乗って命がけで走るのも結構楽しいものだ！

でも、訪問先で見たのは厳しい現実でした。通訳のヴェトナム人が「心がチチンダ！」と表現していたのが、まさにその通りです。

3週間、本当に有意義な旅をさせていただきました。はじめはおすおすと参加しましたが、訪問を重ねるたびに、人びとが生きる姿と現場にひきつけられていきました。

旅行とは別に、ジャパ・ベトナムの支援方法に感動しました。多くのN.G.Oは寄付金の10~20パーセントを人件費、事務費、視察費などの必要経費として計上します。

ジャパ・ベトナムでは、毎年の視察費用は参加者負担です。旅行中の通訳は日本語のできるヴェトナム人の学生と社会人にボランティアでお願いし、彼らの交通費とホテル代だけが主催者持ちです。社会人は仕事を休んで手伝っていました。「わたしたちの国のためにして下さるのですから」と言ってよこんで手伝っていました。これは、ジャパ・ベトナムの今までの長い活動の果実でしょう。お互いの信頼と友情が深い絆を作り、この活動が続けられているのだと思いました。

視察旅行はハードな旅でしたが、本当に素晴らしい企画にご一緒させていただき、ありがとうございました。こんな素敵な企画に積極的に参加する「若者」が増えて、日本とヴェトナムの絆が永く続くことを願ってやみません。